

將軍山古墳石室出土遺物の所在について

岡 本 健 一

はじめに

さきたま資料館では、平成3年度から將軍山古墳の整備事業を着手し、それに伴って遺構確認のための発掘調査を実施してきた。平成3年度には横穴式石室床面の調査を行い、ほとんど残片ではあるが、多くの資料を得ることができた。

周知のように、この古墳の石室は1894（明治27）年に地元の人々によって発掘され、多くの遺物が出土したが、現在は当館だけではなく東京大学や東京国立博物館など7カ所で保管されている。発掘から既に100年余りが過ぎ、これらの散在した資料のたどった経緯も、まもなく歴史の流れのなかに埋没してしまうと考えられる。今回報告書を作成するに当たり、これら貴重な資料が出土してから現状に至る過程についてできる限りの調査を試みた。しかし資料に関わった当事者の方々はみな故人となっており、後裔の方も当時のことは御存じないという事例がほとんどであったため、現在残されている限られた文献を中心とせざるを得なかった（註）。

本稿では、このような経緯を記すとともに、副葬品の種類を総括することによって、將軍山古墳の被葬者像を探る上での、一つの手がかりとしたい。

I 1894（明治27）年の出土資料

1894年7月の発掘について、高木豊三郎『史蹟埼玉』に詳しく述べられている。將軍山古墳の「東側は断崖を為し奇石露出す、下忍村の人増田五左衛門氏之を発見し、採って庭園を趣を助けんと、忍の人山下銓太郎氏と謀り、明治二十七年七月に地主に交渉發掘せしに、石槨の如きものを発見し官許を得て開掘せしに、果たして石槨あり、羨道東に向ひ槨は房州石を以て築かれ底は石を以て畳み粘土を用ひて間隙を埋め、砂を布き、天井は秩父石緑泥片岩にて蓋をなしてあった」ということである。因みに増田氏は当時下忍村の村長、山下氏は医師であり、いずれも地元の名士であった〔文献10〕。石室についてはすでに述べたとおりである〔文献17〕。当時の出土遺物はその後からさまざまな経緯で所有者が分かれていった。その状況について柴田常恵および高木豊三郎の次の2文献を元に検証してみたい。

1 1905（明治38）年の柴田常恵〔文献1〕から

柴田氏は1905年「三月大学より埼玉、群馬、栃木の三県下へ、出張せし際」に1894年に発掘し遺物を所有していた山下銓太郎氏から、発掘時の石室の様子を聞き、「所蔵品の重要品は挙げて大学に寄付せられ」、また同じく遺物を所有していた増田氏からも一部の資料を寄付してもらうこととなった。すでに発掘の当時に東京帝室博物館にごく一部の資料が収められていたので、「故に現今にては大学、博物館、と山下、増田の二氏即ち合せて四個所に其発掘品を所蔵し」ているが、山下

氏所有の重要な遺物は大学に寄付されたので「大学と増田氏とに重要品は藏せらるるなり」という状況になった。

また、これらの遺物は「散失せしは極めて少数にして、其れとても特異のものにあらず」、「今日現存する所の器物を見ば、やがてこの古墳内発掘品の種類を知り得べく、また明に他に頒かたれたるもの数を加ふれば、発掘品の数量も略ぼ察する」ことができるとして、次のようなリストを表している。(見出しは筆者、名称は〔文献1〕のまま)

【武器類】直刀 数本、刀柄 4、剣頭 1、鉾 2、鉄鎌 多数、鉄製小札 多数、鉄兜 1
三輪玉 5

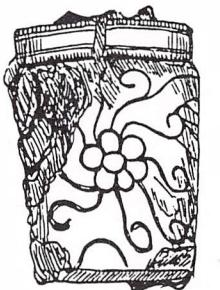
【装飾品】金製曲玉 1、金環 2、金製平玉 35、銀製円玉 2、瑠璃製小玉 多数、鏡 1

【銅鉢、土器類】銅鉢 1、銅椀 2、祝部土器 1

【馬具類】小鈴 6?、大鈴 5?、舌鈴 4?、轡 2、轡のかがみ 1、鐙 2、杏葉 4
雲珠 10、十字形銅器 3、其他泥障等の類

これらの遺物の中で、剣頭は環頭大刀、鉄兜は衝角付冑、銅鉢は高台付蓋付銅鉢、十字形銅器は袋状飾金具(第10図参照)に相当する。また遺物リストの中で、現在所存が不明なものとして、

「金製曲玉、金環、金製平玉、銀製円玉」のような小型の金銀製品があげられる。これについては次項でも触れる。さらに、報告中に唯一図面を載せている、葡萄唐草文状の象嵌が施された刀柄も現在では不明である(第1図)。



1

第1図 1.象嵌を施した刀柄
[文献1]

なお、東京帝室博物館に鉄質鎧破片、刀 2本、鎧様の物 1、轡 1、西洋形鐙 1、馬具 1個、鈴大小4個が収められ、増田氏から鈴三輪玉、馬具、刀柄の一部等が東京帝国大学に寄付されたと述べた以外は、遺物の所存を明らかにしていない。

2 1936(昭和11)年の高木豊三郎〔文献2〕から

柴田論文から31年経て、1936年に高木豊三郎が『史蹟埼玉』という冊子を当時の埼玉村教育会から発行している。この中で將軍山古墳の発掘経過や遺物について、図面を載せながら詳しく記述している。記述の内容を現在の状態と比較すると、矛盾するところが少ないとことから、実際に資料に当たりながら書かれているようなので、当時の状況を知る上で信憑性の高い証言である。

発掘後に「当時帝室博物館に寄贈し現在同館に所蔵せらるるもの」として、

鎧身 2、鐙小片 9、鈴残片 4、金具残片 1、雲珠 2、同残片 8、馬鈴 2、
鉸具 1、輪鐙 2

が記されている。前述の柴田論文よりも一層詳しい内訳となっており、現在の東京国立博物館図版目録のうちのA(後述)とほぼ一致する。

また「其他は山下・増田氏の間に両分せられたものであったが、明治38年4月両氏より更に左の諸点を帝国大学へ寄贈せられた」ものとして、(名称は〔文献2〕のまま)

山下氏より 鈴 3、銅鉢 1、銅椀 1、轡 1、三輪玉 1、杏葉 1、小玉 多数

金属具破片 5

増田氏より 鈴、三輪玉、馬具、刀柄

をあげ、「爾後両氏保管中他に移出せしものもあったであらう、現在両氏の許に存するは」

山下氏 【武器及び武具】刀・鎌鎧の破片、【馬具】雲珠類、【服飾及び調度品】玉類外数種

増田氏 【武器及び武具】直刀刀柄外数種、【馬具】杏葉、鐙外数種、

【服飾調度品】鈴類、鉢外数種

となっている。以上の遺物を総合して、將軍山古墳出土品のリストを表しているが、これは柴田論文をもとにしている。

また『史蹟埼玉』には、各古墳の説明と出土品リストの他に、個々の

代表的な遺物について図面付きの説



第2図 2.金製勾玉 3.金製平玉 4.金環 [文献2]

明がある。この中で特に注目されるのは、現在は所在不明の金製勾玉、金製平玉、金環の図面が掲載されていることである（第2図）。金環は平成3年度の調査でも1個出土しているが、その形態が全く異なることから、遺体が2体以上安置されていたことの重要な証拠である。

さらに、それらの遺物の説明の後に、その遺物の所在を明記しているのだが、金製勾玉、金製平玉、金環、ガラス玉、銀製空玉、鏡の項には、なぜか所在地が記されていない。さらに前項でも触れたように金製勾玉、金製平玉、金環は現在行方がわからないのである。鏡はその後の経過からみて当時増田家にあったことは、ほぼ間違いないが、その他の資料の所在がなぜ明記されなかったのだろうか。『史蹟埼玉』の他の個所には記述もれはないので、敢えて所在を明らかにしていないのではないか。ということは、当時すでに所在不明であったのか、または所有者の名前を意識的に伏せているのか。所在不明であったとすれば、遺物のスケッチメモが残されていたのかもしれない。

上述2文献を通してみると、発掘資料は直後に山下氏と増田氏で2分されたが、その種類や数量はほぼ均等に配分されたようである。石室を発見し、発掘の動機を作った増田氏であったが、発掘を共同して行なった山下氏よりも優越することなく、均しく資料を分け合ったという点に、何かしら心休まる思いがするのは、私だけであろうか。

この『史蹟埼玉』以後、栗原文蔵〔文献3〕や『行田市史』〔文献5〕、金井塙良一〔文献10〕に資料の総括的記述があるが、いずれも上述の2文献に依っている。

3 現在の資料収蔵状況

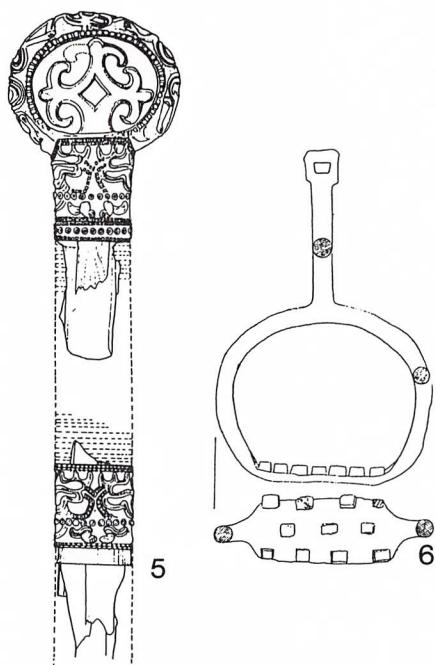
1894年に発掘された遺物は、現在7カ所に分散して収蔵されている。

①東京国立博物館

東京国立博物館〔文献9〕によると、購入経路は2種類A・Bがあり、Aは1895（明治28）年1

月24日に埼玉県から、Bは1950（昭和25）年2月10日に尼芳松氏という人物から購入したものであるという。（名称は〔文献9〕のまま）

- A 鐵矛、挂甲一括、辻金具、杏葉、鈴、磯金具残片、輪燈1対、鈴(小)残片
B 高坏1、乳文鏡1、水晶製三輪玉2、石製盤1、環頭大刀残欠1、銀装大刀残片2、直刀残片1、鐵矛（Aと合わせて4）、挂甲小札一括、衝角付冑残片一括、轡1、辻金具（Aと合わせて7）、杏葉（Aと合わせて4）、鈴（Aと合わせて3）、八角稜鈴1、磯金具残片（Aと合わせて）、輪燈1対、蛇行状鉄器1、鈴(小)2、飾金具1



第3図 5.環頭大刀〔文献6〕、6.輪燈〔文献4〕
な仕上げ」で、光が透けて見えるほど薄く磨いている。このような遺物は少なくとも国内では例がなく、朝鮮半島や中国にも管見に触れたものはない。これほど精巧な作りで、稀有な資料でありながら、柴田論文や『史蹟埼玉』には、その記述が全くないのである。これは金属器の模倣と考えられる器形であるが、同じく金属器の模倣とされる土器としては、古墳時代よりも約100年ほど下がった時期に、類似する器形が見られる。この石製盤が追葬の際に副葬されたものかもしれないが、他に7世紀後半に相当する遺物はない。元来將軍山古墳の副葬品ではなく、奈良を経由して東京国立博物館に移る間に、どこかで紛れ込んでしまった可能性も考えられる。とにかく東京国立博物館に収蔵されるまでは全く存在が記録されていないことから、この考えも否定できないだろう。現在では調査の手段もないが、ただ石製盤が將軍山古墳が作られたと考えられる6世紀後半の遺物ではないことは確かなようである。

このように、ほとんどの資料はBに属している。Aの資料を購入した1895年は発掘の翌年にあたり、発掘当事者である山下氏から県を通して帝室博物館に渡ったものらしい。このことは、柴田論文や『史蹟埼玉』にも記されている通りである。

Bの遺物は、1936年の段階では増田家に収蔵されていたもので、その後1950年までに奈良の尼氏に渡っていたようである。後で述べるように増田家の資料は1936年以降、すべて他の人物の手に移っていることから、何らかの理由で清算せざるを得なかったのかもしれない。増田家にあった最も優れた遺物がなぜ奈良に行ったのかはわからない。

ところでBの遺物の中で特に注目されるのは石製盤である。『目録』によれば、この石製盤は「蛇紋岩製。口径12.4、高3.0。高台あり。外面は削りののち丁寧な仕上げ」で、光が透けて見えるほど薄く磨いている。このような遺物は少なくとも国内では例がなく、朝鮮半島や中国にも管見に触れたものはない。これほど精巧な作りで、稀有な資料でありながら、柴田論文や『史蹟埼玉』には、その記述が全くないのである。これは金属器の模倣と考えられる器形であるが、同じく金属器の模倣とされる土器としては、古墳時代よりも約100年ほど下がった時期に、類似する器形が見られる。この石製盤が追葬の際に副葬されたものかもしれないが、他に7世紀後半に相当する遺物はない。元來將軍山古墳の副葬品ではなく、奈良を経由して東京国立博物館に移る間に、どこかで紛れ込んでしまった可能性も考えられる。とにかく東京国立博物館に収蔵されるまでは全く存在が記録されていないことから、この考えも否定できないだろう。現在では調査の手段もないが、ただ石製盤が將軍山古墳が作られたと考えられる6世紀後半の遺物ではないことは確かなようである。

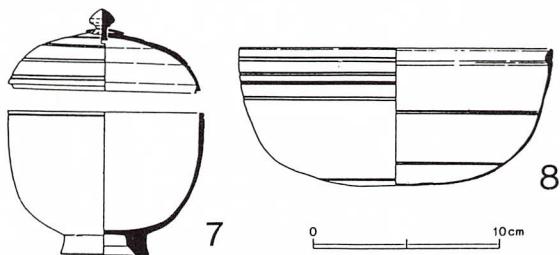
②東京大学総合研究資料館

高台付蓋付銅鏡1、銅鏡1、金銅製雲珠1、金銅製鏡板1、金銅製鉗具1、鞍橋金具残欠、金銅製鈴1、八角稜鈴1、挂甲小札、袋状飾金具1、不明金具1、鉄鎌がある。

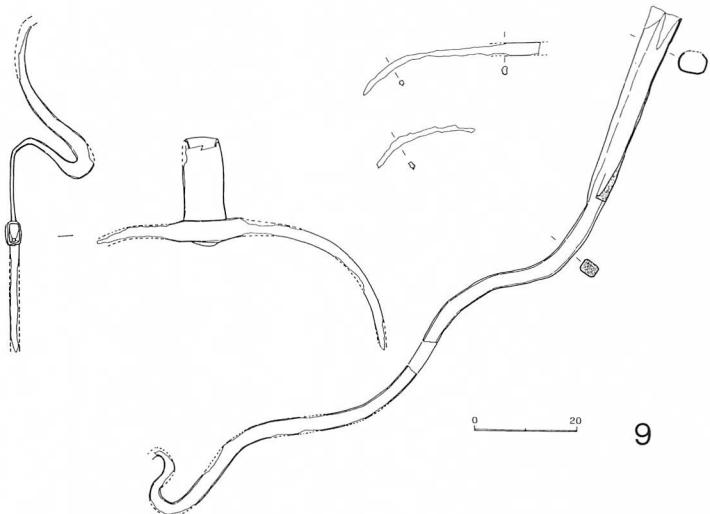
これらの資料は言うまでもなく、もと東京帝国大学人類学教室に収蔵されていたものである。1905年に大学に寄贈された経緯は前述したとおりである。柴田論文と『史蹟埼玉』では、当時帝国大学へ寄贈された資料のリストが、若干異なっている。とくに柴田論文には銅鏡の記述がないが、写真図版には銅鏡が2個体とも「人類学教室蔵」として写っているので、単に記述もれであったのだろうか。『史蹟埼玉』のリストと数量で若干の相違はあるが、ほぼ一致しているといえよう（両文献に記述のある三輪玉は現在確認できない）。調査当時の記録が残されているとすれば、東京大学理学部人類学教室にあるだろうが、現在のところ確認することはできない。

③埼玉県立博物館

蛇行状鉄器が2個体所蔵されているが、県立博物館に至るまでの経緯については、栗原文蔵〔文献3〕や関義則〔文献13〕に詳しい。これら蛇行状鉄器は当初増田家に所蔵されていたものが、後に渡辺直熊氏の手に移ったという。その年代は全くわからないが、川鍋重寿氏の話では昭和30年ぐらいではないかという。渡辺氏は長く行田市の文化財に関して尽力された方なので、



第4図 7.高台付蓋付銅鏡 8.銅鏡 [文献7] [文献15]

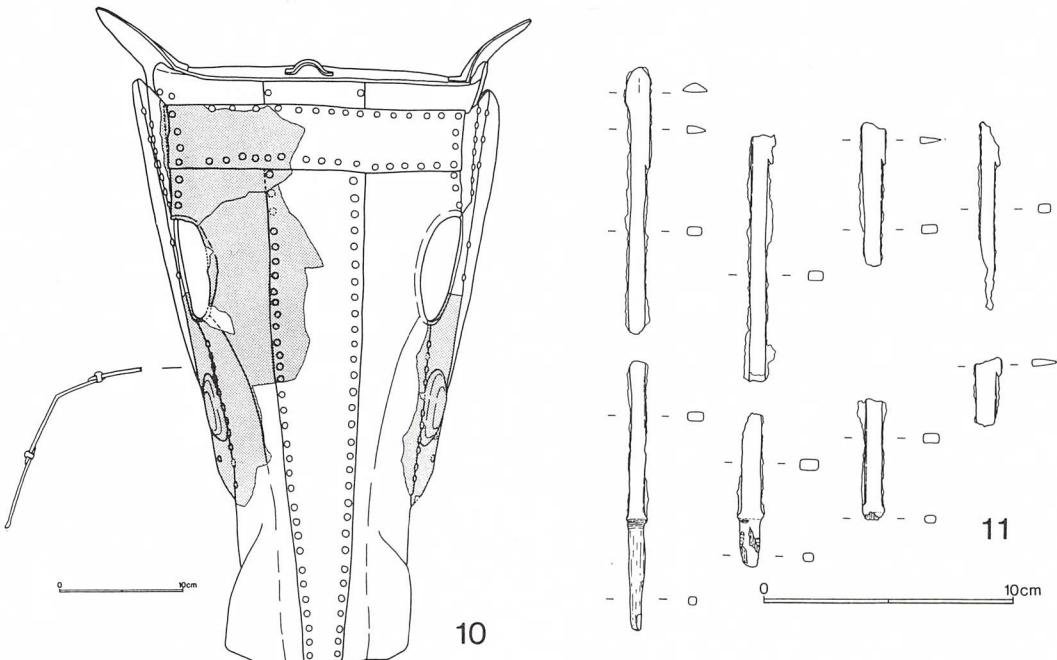


第5図 9.蛇行状鉄器 [文献13]

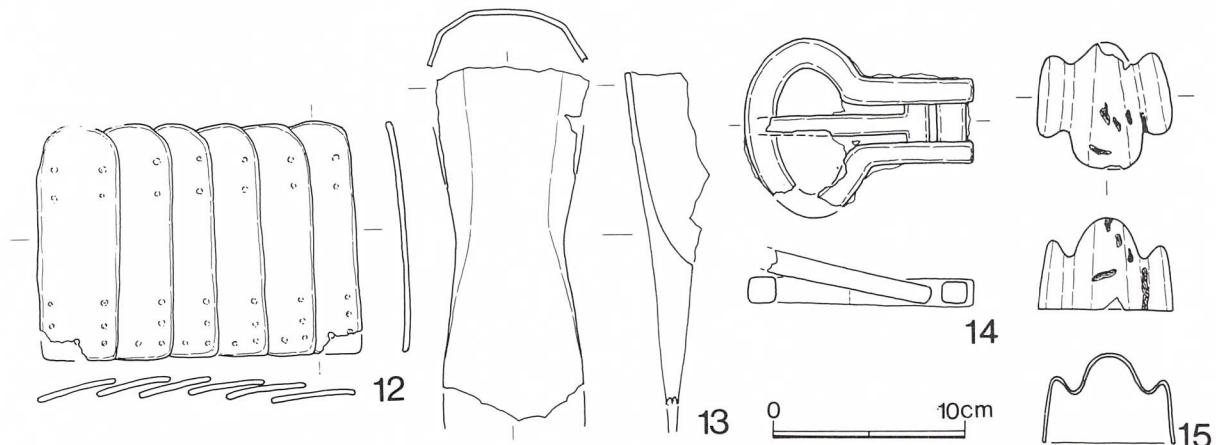
その関係で増田氏の手から渡ったのだろう。そして昭和58年度になって氏より県立博物館に移ったのである。2個体のうち1点は東京国立博物館蔵の蛇行状鉄器と同一個体の可能性が指摘されている。柴田論文や『史蹟埼玉』には記述のないものであるが、当時としては蛇行状鉄器の存在が知られず、全く注意に登らなかったのだろう（後者の刊行時にはすでに末永雅雄氏らの研究が世に出ていた）。

④埼玉県立さきたま資料館

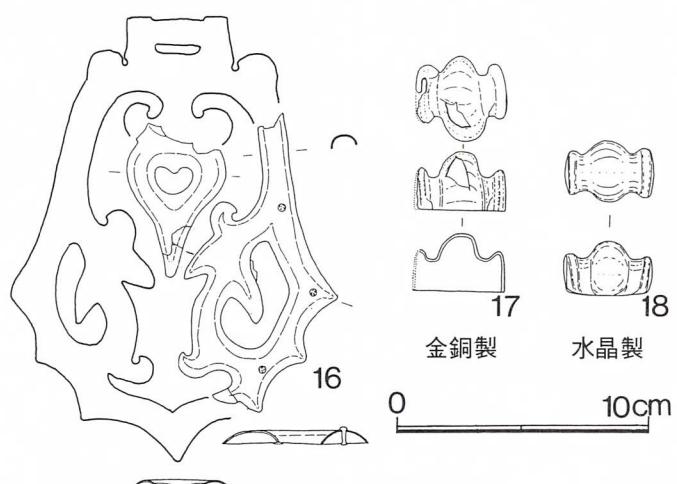
当館が所蔵している1894年出土の資料としては、馬胃片、小札多数、直刀残片、鉄矛残片、鉄鎌残片、鉄斧1、鉗具1、ガラス玉、三輪玉1がある。金銅製三輪玉のみは新井氏から寄贈されたものだが、それまでの経緯は不明である。その他はすべて蛇行状鉄器を所蔵していた渡辺氏より1973年に寄贈されたものである。これらは増田家旧蔵のもので、おそらく蛇行状鉄器と一緒に渡辺氏の手に移ったと考えられる。いずれも『史蹟埼玉』には記述のないものである。それは鉄製品や破片となってしまったものも多く、いわゆる「見た目の良い物」はないからであろう。しかし、鑄びた



第6図 10.馬胃 [文献15] 11.鉄鎌 [文献11] (県立さきたま資料館蔵)



第7図 12.小札 13.鉄斧 14.鉸具 15.金銅製三輪玉



第8図 16.金銅製棘葉形杏葉、17・18.三輪玉 [文献8]

鉄片の中から、後に馬胃と判明したもののや、鉄斧なども含まれ、決して資料的価値が劣るものではない。

⑤本庄市教育委員会

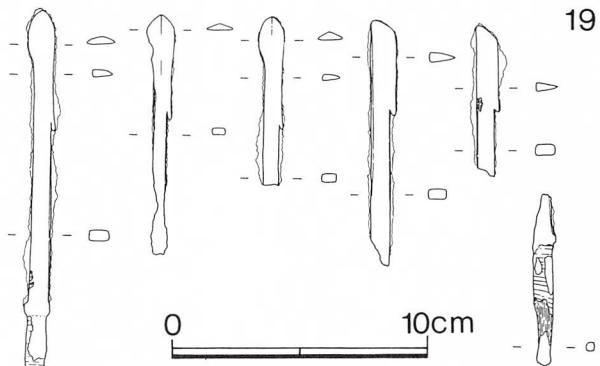
金銅製棘葉形杏葉、金銅製三輪玉
1、水晶製三輪玉 1、ガラス製小玉56
があり、すでに本庄市立歴史民俗資料館の『紀要』([文献8])に紹介されている。これらは資料館が開館するに当たって、地元の諸井家より寄贈を受けたもので、当家の先々代、諸井興久

氏が収集したものという。

資料のうち、杏葉の表面に「明治二十八年秋十月 武藏国北埼玉郡埼玉村字將軍墳ヨリ発見ス 提根村増田氏被贈外三輪玉及び小玉二百」とあり、増田氏より贈られたことがわかる。この諸井興久氏は1900年に亡くなってしまっており、柴田論文以前にすでに資料は授受されていたようである。かつて氏は北埼玉郡長を勤めていたこともあり、その関係で資料が贈られたのであろう。柴田論文にある「同様の器物二三個若しくは四五個ありしを他に懇望せられて頒ちたるに過ぎず……」の一例であろう。

⑥行田市教育委員会

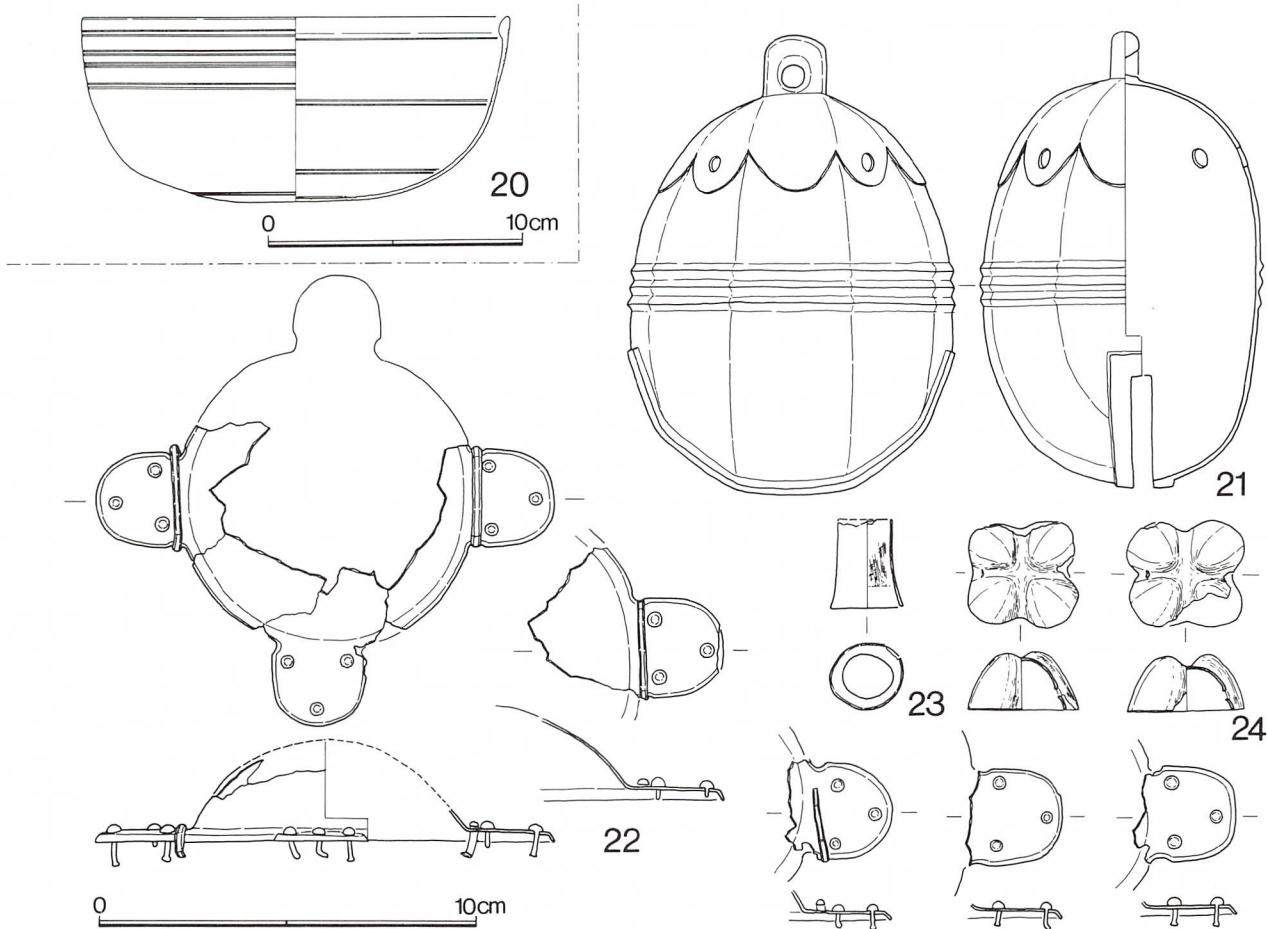
衝角付冑の破片と小札・鉄鎌があるが、
冑は東京国立博物館所蔵のものと同一個体
であることが確認されている。どのような
経緯で教育委員会に収蔵されたかは不明で
ある。



第9図 19. 鉄鎌（行田市教育委員会蔵）[文献11]

⑦田島邦夫氏

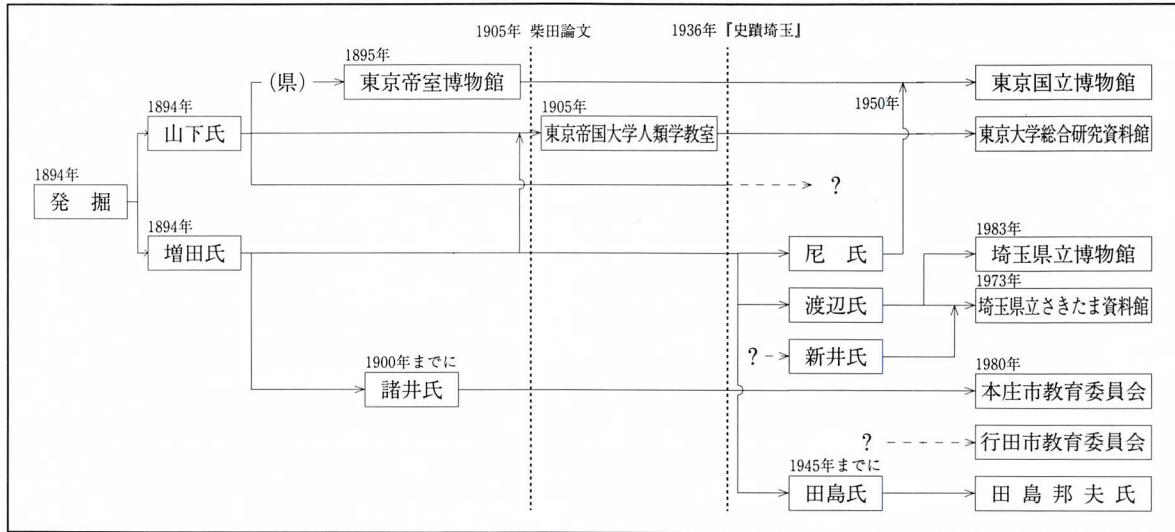
銅鏡 1、八角稜鏡 1、金銅製辻金具片、袋状飾金具 2、金銅製筒形飾金具 1、金銅製棘葉形杏葉
片、三輪玉片があり、現在はさきたま資料館に寄託されている。



第10図 20. 銅鏡 21. 八角稜鏡、22. 辻金具 23. 金銅製筒形飾金具 24. 袋状飾金具（田島邦夫氏蔵）

これらの資料は増田氏から埼玉神社の宮司を勤めていた田島氏に寄贈されたもので、いつのことかは正確にはわからないが、現所有者の田島邦夫氏の話によると戦中にはすでにあったという。このことから『史蹟埼玉』が書かれた1936年以降、それほど時間を置かずに、田島家に納められたと考えられる。ほとんどの資料は東京国立博物館や東京大学所蔵の資料と重複するものであるが、諸井氏や渡辺氏に渡ったものと比べると、いわゆる「光り物」が多く含まれている。これは埼玉神社に奉納するという意識が強く働いていたからであろう。

以上のような出土資料の流れを図にまとめたものが、第11図である。



第11図 1894年出土資料の流れ

この図を通して次の問題点が指摘できる。①山下家に1936年『史蹟埼玉』の時点で存在した資料の行方が確認できない。②さきたま資料館に寄贈された新井氏旧蔵資料、および行田市教育委員会所蔵資料の出所がわからない。これらは他の資料のいきさつからみて、おそらく増田氏から分配されたものと考えられる。また③増田氏から各氏に分配された時期がわからない。これは田島氏のところに戦時中にはすでにあった、ということと、渡辺氏に昭和30年ころ資料が渡ったという漠然とした証言しか得られていない。④奈良の尼芳松氏はどういう人物で、増田氏はどういう関係なのかが不明である。現在のところ確認できていないが、これについては今後の課題としたい。

II 平成3年度出土資料

平成3年度から将軍山古墳の保存整備事業のため、横穴式石室の調査を行った。石室の状況についてはすでに発表した通りである [文献17]。石室床面からは、いわば1894年当時の発掘の取り残しの遺物が相当数出土しているが、詳細については現在整理中である。遺物の種類についてはおよそ次の通りである。

【装身具】金環1、銀製空玉片、鉄地銀張飾金具6、ガラス玉多数

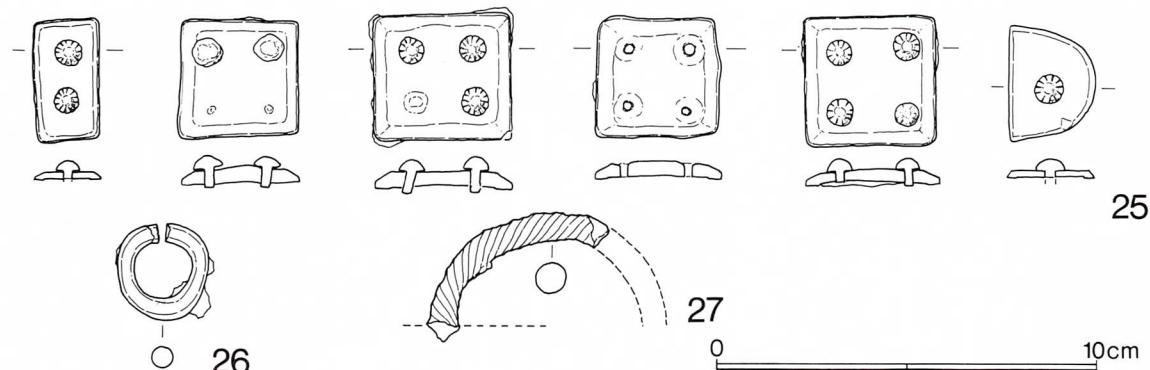
【武具】振り環頭1、鉄鎌多数、挂甲小札多数

【馬具】鞍金具、杏葉・辻金具・鈴の金銅製品破片

【土器】須恵器高环片（東京国立博物館所蔵のものと同一個体とみられる）

その他不明鉄片も多数出土している。

金環は前述したように、かつて出土して『史蹟埼玉』に掲載されている図面のものとは明らかに異なるものであり、2体以上の埋葬を強く物語る証拠である。その他の遺物は既に出土していたものと同種である。以下に主要な遺物の実測図を示すが、詳細は報告書に譲ることにする。



第12図 25. 鉄地銀張飾金具 26. 金環 27. 振り環頭

III 将軍山古墳石室出土の副葬品 —まとめと展望

1894年および平成3年度（1991年）に出土した石室内の遺物を総合して、将軍山古墳に副葬されていたものを想定すると、おおよそ次のようになる。

出土遺物名	指定個数	所 在	その他の大刀 数点	金銅製棘葉形杏葉 4以上
装身具			①④	①⑤⑦
金 環	2対	④1対は不明	①④	②
金 製 勾 玉	1	不明	②④⑥	④
金 製 平 玉	35	不明	①②④⑥	①③
鉄地銀張飾金具	1式	①④		
袋 状 飾 金 具	3	②④		
金銅製筒状飾金具	1	④		
ガ ラ ス 小 玉	多数	④⑤		
乳 文 鏡	1	①		
武器類				
環 頭 大 刀	1	①		
玉 繻 大 刀	2	三輪玉①④⑤⑦		
馬具類				
轡			2 (①②)	
輪 鐙			2対 ①	
鞍 金 具			1 (①④)	
雲 珠			1 (②)	
辻 金 具			9 (①⑦)	
八 角 稜 鈴			5 (①②⑦現存3)	
銅 製 鈴			4 (① 現存3)	
金 銅 製 鈴			6～ (①② 現存3)	
工具類				
鉄 斧			1 (④)	
容器類				
高台付蓋付銅鏡			1 (②)	
銅 鏡			2 (②⑦)	
須恵器 高 坏			1 (①④)	
(石 製 盤)			1 (①)	

所在 ①東京国立博物館 ②東京大学総合研究資料館 ③埼玉県立博物館 ④埼玉県立さきたま資料館
⑤本庄市教育委員会 ⑥行田市教育委員会 ⑦田島邦夫氏

金環が2対あるので、2体以上が埋葬されていたのは確実である。副葬品全体を見渡しても2組が基本となっている場合が多い。例えば挂甲については、小札に繊維と革の2種類の紐が残存していたことから、2組以上の挂甲があったと予想されている（塙田博道氏御教示による）。轡も金銅製鏡板と素環鏡板の2種類があり、輪鐙にも2対ある。稻荷山古墳では、槻礫の1人の被葬者に1組の武器や馬具しか副葬されていなかった点を勘案すると、将軍山古墳でも1被葬者には武器、馬具1式づつが副葬された可能性は高い。初葬と追葬の時期差は、造出しから出土した須恵器罐と石室

内出土の高坏が示す時期差とする考え方がある矛盾はない。具体的な考察は報告書で行うことになるだろう。

今から100年余りも前に将軍山古墳の石室が発掘されて、資料が散在してしまったことについては、現代では嘆く向きもあるかもしれない。しかし、当時すでに古墳の上には住居があって墳丘も相当削平されていたと思われる。そのまま放置しておけば、それこそ資料は紛失の憂き目にあったことは間違いない。そこで増田氏と山下氏という、史蹟や古物に造詣の深い人々によって発掘されたのは、むしろ幸運であった。今でも「埼玉古墳群出土」とのみ伝えられる資料が多く存在し、ほとんどの古墳に盗掘口が穿たれているのを見ると、散在しながらも将軍山古墳石室出土の資料として、確実に残されていることに安堵せざるを得ない。また多くの個人の手を経たにもかかわらず、紛失した資料もほとんどなく、現在ではすべて公共の博物館で一般に公開されているのも幸運である。しかし、これらの幸運は何と言っても、それぞれ資料を大切に保管してきた所有者の良識と誠意に依るのだということを、我々は忘れてはならないだろう。

なお、資料の収集にあたっては、川鍋重寿氏、大谷徹氏、塙田博道氏、松浦宥一郎氏から助言いただいた。厚くお礼申し上げます。

《参考文献》

- [文献1] 柴田 常恵「武藏北埼玉郡埼玉村將軍塚」『東京人類学会雑誌』第231号、1905年
- [文献2] 高木豊三郎『史蹟埼玉』埼玉村教育会、1931年
- [文献3] 栗原 文蔵「蛇行状鉄器出土の武藏將軍山古墳」『埼玉研究』5、埼玉県地域研究会、1961年
- [文献4] 奈良国立博物館監修『天平の地宝』朝日新聞社、1961年
- [文献5] 『行田市史』上巻、行田市役所、1963年
- [文献6] 穴沢啄光、馬目順一「龍鳳文環頭大刀試論」『百済研究』第7輯、1976年
- [文献7] 毛利光俊彦「古墳出土銅鏡の系譜」『考古学雑誌』64巻1号、1978年
- [文献8] 長谷川勇、石橋桂一「諸井家寄贈考古資料」『紀要』創刊号、本庄市立歴史民俗資料館、1986年
- [文献9] 『東京国立博物館図版目録 古墳時代編（関東Ⅲ）』1986年
- [文献10] 金井塙良一「埼玉將軍山古墳の性格をめぐって」『埼玉考古学』柳田敏司先生還暦記念文集、1987年
- [文献11] 田中 正夫「將軍山古墳出土遺物の資料調査報告(1)——鉄鏃——」『調査研究報告』第1号、埼玉県立さきたま資料館、1988年
- [文献12] 埼玉県教育委員会『丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・將軍山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第6集、1988年
- [文献13] 関 義則「埼玉將軍山古墳出土の蛇行状鉄器」『埼玉県立博物館紀要-16』1989年
- [文献14] 若松 良一「埼玉將軍山古墳出土の馬胄」『調査研究報告』第4号、埼玉県立さきたま資料館、1991年
- [文献15] 大谷 徹「北武藏出土の銅鏡」『埼玉考古学論集』1991年
- [文献16] 埼玉県立さきたま資料館『さきたま將軍山古墳と銅鏡』1992年
- [文献17] 岡本 健一「埼玉將軍山古墳の横穴式石室について」『調査研究報告』第7号、埼玉県立さきたま資料館、1994年

(註) 資料の所蔵者や関係者については、従来公表されている氏名のみを記し、論文執筆者の敬称は省略した。またすでに公表されている実測図は、今回新たに掲載した実測図よりも縮尺を小さく設定した。